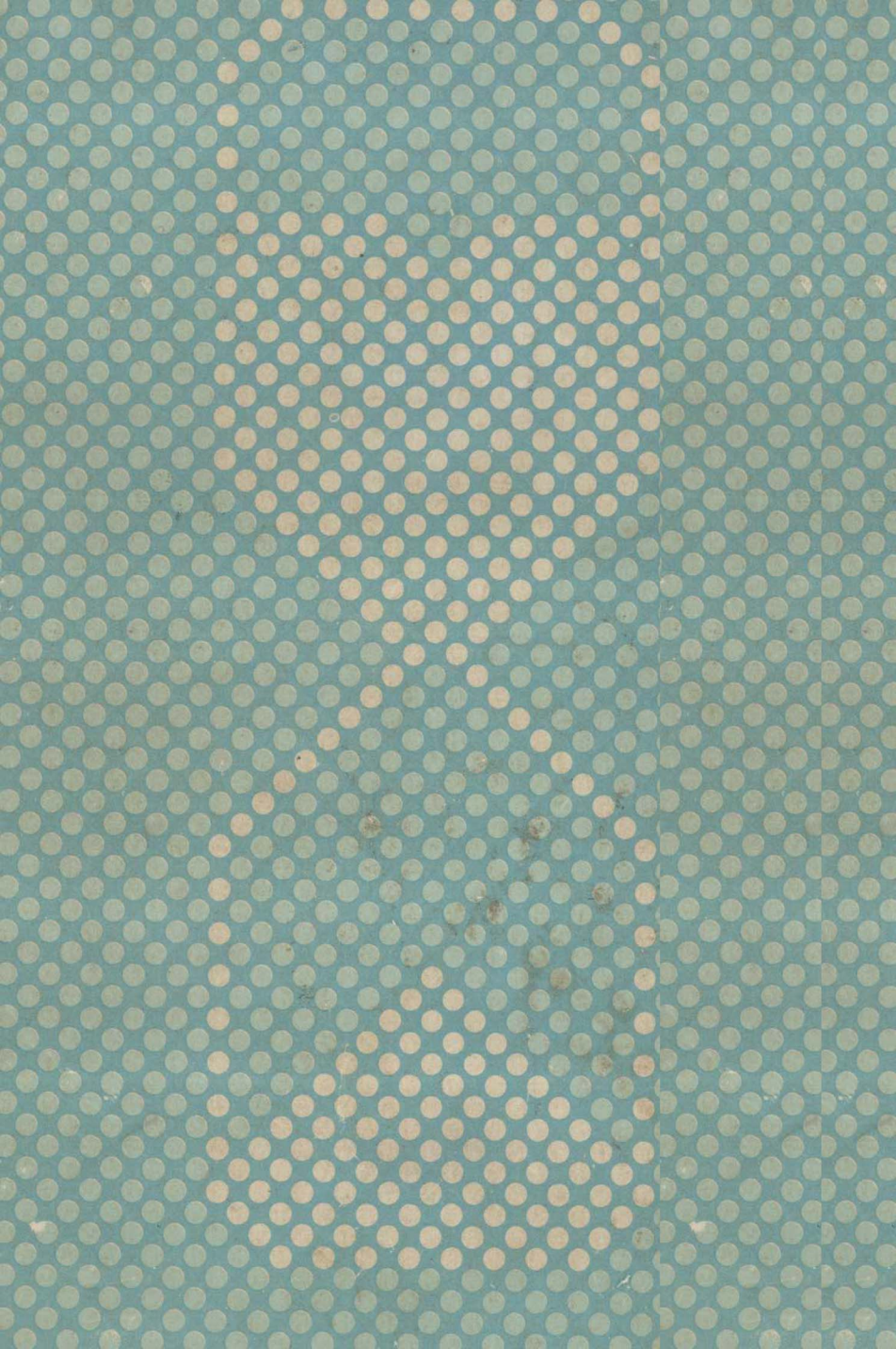
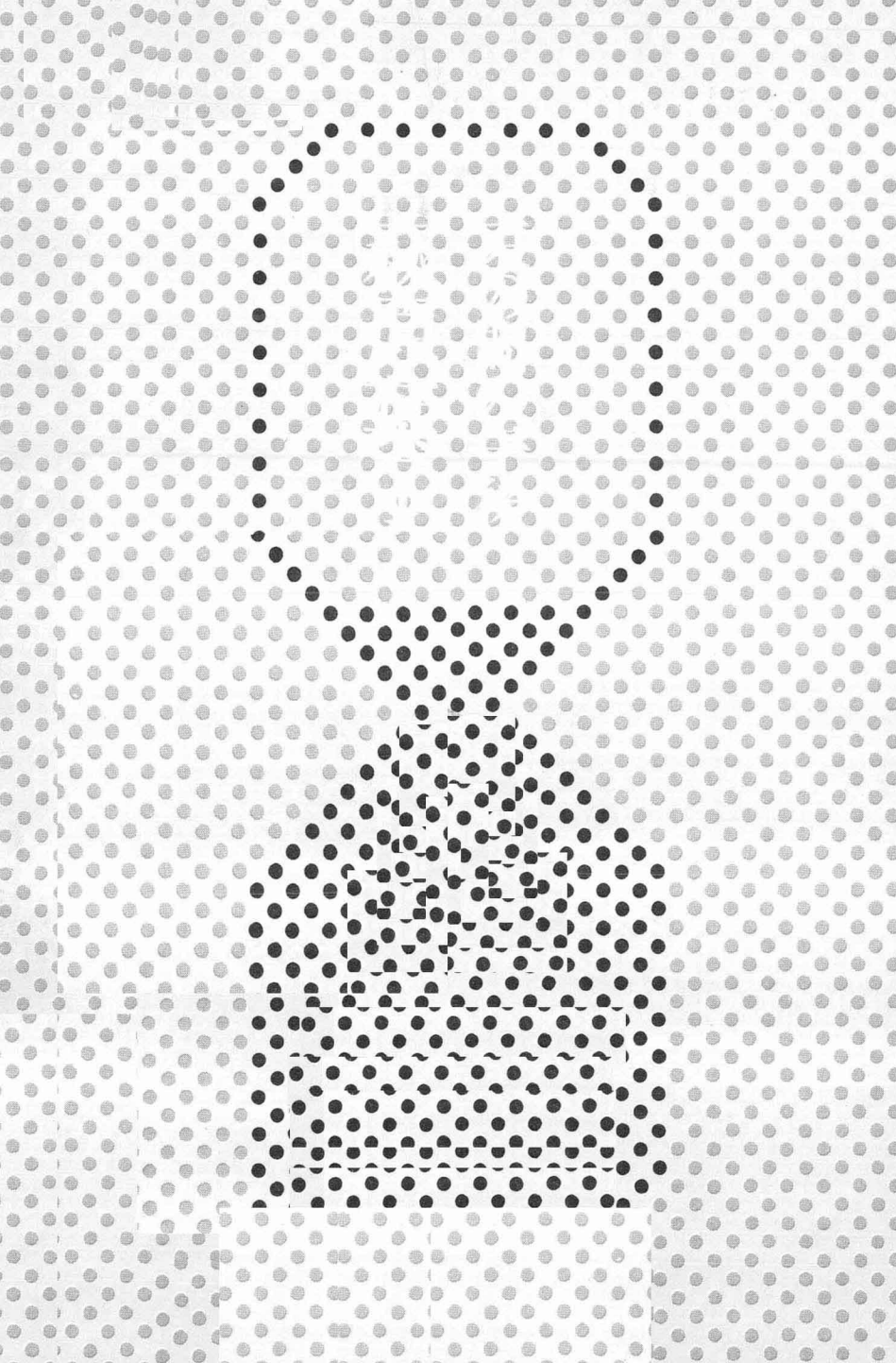






束の間の午後

©一九七二 検印 廃止

昭和四十七年一月三十一日初版  
昭和五十二年三月十日再版

著者 萩原葉子

発行者 高梨 茂

印刷 三陽 社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一  
電話 (五六一) 五九二一  
振替東京二一三四

束の間の午後 目次

束の間の午後

5

葉  
桜

45

息子の結婚

85

対  
岸  
の  
人

153

鬼  
が  
笑  
う

135

装  
幀

萩原朔美

束の間の午後



楓子<sup>かえで</sup>は四十歳の半ばを過ぎている。貫禄のそなわってくる中年女の筈であるが、貫禄どころか息子や嫁にも軽蔑の眼で、眺められている。良い年をして気が若く、まだ二十代のつもりで暮しているからだ。うかうかしていると五十代に入ってしまうというのに、お若いと言われるたびに、若向きの髪形に変えてみたり、短すぎるスカート丈を更に短くしたりする癖がある。

息子の夏夫に、「鏡を見なさい！」と言われ、三面鏡の前に立つと、なるほど小皺やシミの類が目立ち、年齢がむき出しになっているのだった。こんな時の楓子の気の滅入り様はひどく、有頂天から地獄へ堕ち、人にも会わないで部屋に閉じ籠っているのである。

極楽と失意の繰り返しの毎日で、嫁の小枝など、つき合いかねているのであった。その上、楓子の書く小説は若者の関心を惹かないらしく、作品に関する話題を避けている。楓子はそのことには気がつかないうぬぼれた顔で、賞められることを期待し、近作が発表されると、「面白かった？」と小枝に催促するのだ。

遠慮してはつきりしない小枝をじれったがつて、正面から堂々と向つて来るのは、夏夫である。

楓子の痛い所を突き、自信を挫き、立ち上れないほどに打ちのめそうとするのだった。それでもしなくては、自分達がモデルにされる私小説から蒙る迷惑さや、若者のついてゆけない古くさい小説の退屈さから、足を洗ってもらえないと思つてゐるからである。

一人息子に嫁が来て喜んだのは良いが、楓子の勇気を挫く人間がまた一人増えたことになつたと、苦笑するのだ。

或る日、夏夫に手ひどく批評されて、しょんぼりと坐り込んでいた時である。

垣根の外で、「こんばんは」と、若い男の声がした。夏夫と小枝の住んでいる庭先の家と楓子のいる母屋とは、目と鼻の間にあるので、夏夫達の友達が来る度に取り次がなくてはならぬのだった。楓子が重い腰をあげて出てゆくと、カラタチの白い花の向うに、背の高い少年が立っている。

「××楓子という人の家はここですか」と、言つた。

楓子は驚いた。見ると珍しい身なりの少年である。夏夫に地獄に堕されていた楓子は、少年の出現を喜んだ。いそいそと柴折戸を開けて、名前も聞かないで、家の中に招じ入れたのである。

「母にサインを頼まれて来ちゃいました。家が分らなくて帰ろうかと、思ったんだ」

人懐っこく楓子に言って、一冊の著書を手渡した。少年の持っているものはこの本だけで、細いGパンのポケットには、ハンカチーフ一枚入れてないように身軽である。身体中が足のように細く思われた。彫りの深い顔立ちで、インディアンのカリー族を思わせるような皮の上衣に、皮の先に房のついたベルト、皮のターバンを巻いている。

夏夫の友達にも、楓子の驚くほど珍しい服装の若者が来るが、この少年の服装には度胆を抜かれたのだった。赤茶色に染めた髪を女のように肩まで垂らしているのが、整った顔立ちに不思議に似合っている。

楓子は若い恋人が突然現われたと錯覚してしまったのだ。たとえ母親に頼まれて来たのである。でも、水際立って美しい少年が尋ねて来たことに、持ち前の単純さで有頂天になった。サインが済んでも、うっとり少年の服装に眼を凝らしながら、鏡の中の小皺やシミのある容貌を忘れ、例の二十代の気持になって若やいだのである。

立ち上るきつかけを失った少年は、次々に運ばれて来る馳走を持て余し、コーヒーばかり飲んでた。楓子は、普段インスタントで間に合せ、夏夫に頼まれてもポットでは入れなかったコーヒーを、何回となく少年のために入れ替えた。幸い、到来物の本場のブラジルコーヒーがあったのだ。コーヒーの沸く新鮮な香りが充滿した。

母親の孝行のために使いに來たものの、これほど変った小母さんは初めてであると思つたのか、少年は馳走よりも、早く放免されることを願ひ、楓子の話はうわの空だった。おまけに楓子の言葉は発音が悪くて聞き取りにくい。何やら一人よがりのことを言つては、面白そうに笑つてばかりいて、少しも意味が通じないのだ。

楓子は少年が浮かない顔をしているのに気がつく、助けを求めて夏夫の家に駆けて行つた。たかだか息子と同年輩の若者の相手に、すけだちを頼むなど、これだから母親の示しがつかないのだということを、綺麗さっぱり忘れてゐる。庭下駄を履いた顔は、緊張していた。

夏夫は厳しい顔で、「ぼくの出る幕じゃない」と、断わるのだったが、小枝に勧められて、嫌々母屋に來たのだ。

「コーヒーをぼく達にも入れてよ」と、夏夫は来るなり不服そうに楓子に言う、少年の隣に坐つて気軽に話し出した。小枝も前からの友達のように軽く応対する。若者同士は一瞬の間に通じる要素を持っているのか、たちまちのうちに音楽や映画や芝居の話題に花を咲かせ、少年の仕事のロック・バンドの世界にも及んだ。

少年が何を仕事にしているのか、楓子には気のつかないことであつたが、夏夫は自分の経営している会社をPRし、少年もロック・バンドをPRしていた。少年は皮のターバンを外し、次第に生き生きとした表情を見せ、浮き腰だった足を長く延ばして、残した馳走を再び食べ始

めた。

楓子は時々知っている顔で相槌を打ちながら、仲間外れの間の悪さを隠そうと努めるのに懸命だった。

楓子は美しい少年がファンにしていることを夢見ていたのであった。楓子のファンは大抵主婦で、若い男には人気がないが、友達の女流作家のように、花束を抱えて尋ねて来る美少年が、自分にもいる夢を見ていたのだ。楓子は少年が帰ったあとも夢見心地だった。

「あきれてしまったよ」と、夏夫は言った。

「身元もよく分らない人に、あんまり親切にしない方が良いわ」と、小枝は言った。

小枝は容姿の端麗な少年とは見ていなかった。若者同士は互いの美の真価を発見できないのだらうかと、楓子は不思議であった。

特異な個性のある人間でもなく、特別に腕の良いロック・バンドのリーダーでもない男に、何のために血相変えてまでサービスしたのか、小枝たちは腑に落ちないのだった。

「あの眼は子供の頃に苦労した眼よ。それに少年どころか立派な男の人の眼だわ」と、遠まわしに批難して、姑が深入りしないように助言している落ち着きぶりである。小枝の冷静を見ると、「ごめんなさい。お世話かけてしまつて！ 気をつけるからゆるしてね」と、どっちが

嫁か姑か分らない、気弱な態度を示す。楓子には小枝が小姑のように見えた。

小枝には楓子から奪った夏夫がいるのに、そのうえ、楓子が夢を実現したつもりで幸福感に浸っている相手まで、取り上げるつもりなのか。若い女というものは食欲である。

楓子は若者コンプレックスに陥っていた。

夏夫や小枝が筈のように、日増しに成長するにつれて、その勢に圧倒され、自分は老いた竹にすぎないと思い、考えることに自信が持てなくなったのである。若者の付焼刃の発言であっても、自分のような老人の追いつけない発想を持っているのだと解釈して、うなだれる。

電車に乗っていても、喫茶店で人に会っている時も、向い側の若者から、「この小母さん一体誰だろう？ 時代に遅れた感覚の持主だ」と言いたい顔で眺められているかのように思ってしまう。

楓子には必要以上の自己卑下と被害妄想癖を持っているのだった。その一方おめでたくて、若い気で暢気にはしゃぐところもあって、楽天家なのか苦労性なのか分らないのだ。

少年の出現は、楓子の自己卑下と被害妄想癖を解消してくれる絶好の機会だった。楓子の書くものについては何も言わないし、夏夫や小枝のような批判的な態度は示さない。

無邪気な子供っぽい態度で、会う毎に親しんでくるのだった。

「この頃、お姑さん、生き生きしているわ。何故かしら」と、小枝はからかうのだった。楓子

はその冗談めかした言葉の中に、「あの男の人、また来たんですか」という批難が含まれていることを知っていても、「生き生きとしている」と言われたことの方がうれしいのだ。少年のおかげで生き生きして来たのかと思うと、楓子は一層少年を欲待した。

少年が初めて来た日、「また遊びに来たいわ」と女のようなアクセントで言ったのを世辞とも知らないで、楓子は次に来る曜日と時間まで約束させてしまったのである。少年は楓子の欲待ぶりに乗じて、一人よりも仲間に食事をさせてもらった方が合理的であると思い、バンドのメンバーを連れて来るようになっていた。

楓子を「先生」と紹介したので、仲間は例の若者特有の「この小母さん一体誰だろう」という顔で見ながら、空腹を満たしてくれる人ならば、誰だって俺達に関係ないことだという態度を露骨に見せて、食べ終ると「じゃあな」と、口々に言って帰ってゆく。

少年も一緒に帰ることがあったり、途中で引き返して来たりするのだが、さすがに楓子に気の毒そうな顔で、

「しょうがないなあ。もう連れて来ないよ」と、大抵はあとに残るのだった。だがそんな時の少年の翳のある眉毛のあたりは、皆と一緒に帰りたいところを我慢した苛立ちが隠せない。

楓子はその我慢に対して感謝のつもりで、少年の欲しがっている買物につき合い、パンタロンやヒッピーシューズ、はては仕事に使うエレキ・ギターまで奮発しようとするのだった。

いつの間にか都心のS街やG街の、若者相手の店の多い周辺をデイトする習慣が付き、買物の後は喫茶店やスナックバーで、ゆっくり休む段取りになっていたのである。楓子の知らなかった男ばかりの喫茶店や、どこもなく異様な雰囲気漂っているスナックバーに案内されると、楓子は夢見心地だった。不思議に若いボーイ達は楓子にサービスしてくれる上に、へんな小母さんという態度を示さないからである。すっかり良い気分になって、高い勘定も高過ぎると思わなかった。少年はどこへ行っても顔が利き、ボーイ達に大いにもてるのだ。楓子にサービスの良いのも、少年の顔のためだとは、楓子は気がつかなかった。自分がもてるのだと思つてよろこんだ。

少年は、横断歩道を歩く時など、楓子の腕を取つて歩いたり、ショウ・ウインドウに女物のアクセサリーを見ると、

「楓子さんに似合うと思うよ」と、足を止めて熱心に覗いたりする。

楓子は少年の心遣いに感激するのだった。少年から見れば母親のような年齢の女にアクセサリーを選ぶなど、夏夫より貴重な相手であると感極まる。ショウ・ウインドウに映っている少年はフランス映画のスターのような異国的なムードがあると、ひそかに胸を躍らせるのであった。